

名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻(十)

浅井圭子

『浅間ヶ嶽焼書付』(後半)

今回の翻刻は、名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻(九)〔『あいち国文』第九号 平成二十七年九月 あいち国文の会〕に続くもので、『続学舎叢書』第二冊の最後部に所収されている『浅間ヶ嶽焼書付』の後半部分の翻刻である。天明三年浅間山大噴火時についての『文月の記』(八九オー一〇〇ウ)と、四件の書き付けである。

『文月の記』の作者は、高崎の羽鳥一紅。本文には、濁点、フリガナ、読点が付されている。読点はすべて朱筆、フリガナの一部も朱筆である。八九丁裏は、二本線によって消された一行半の文字がある。反古紙を逆さにして書写に使用したものと思われる。「ひ、れたれハ」(九一オ)「ひ、きたれハ」、「共極桜」(九二オ)「炎ハ柳桜」(思ひ絶よし)(九六

オ)「思ひ給はし」、「極瀬の渡し」(九七ウ)「柳瀬の渡し」、「四斗橋」(一〇三オ)「四斗樽」など、字形が似ることによって生じたと思われる誤字があるが、勝手に訂正せず、書写元本を忠実に書写したものと思われる。『文月の記』または『文月浅間記』、『文月物語』なる諸本のうち、複写にて次の本を見ることができた。

- ① 国立国会図書館蔵『文月物語』福王茂右衛門盛有書
- ② 翻刻『天明三年浅間山噴火史料集 上』13『七月の記 天明三年浅間山噴火之記』亀井孝氏蔵
- ③ 西尾市岩瀬文庫蔵『文月浅間記』版本(文化十二年上

毛高崎羽鳥氏女一紅述 茅花園壺梅園蔵版)

前序と奥に識語を有するのは、『続学舎叢書』所収の当該本のみである。語句の異同はあるが、内容はいずれも酷似している。同一系統の本と考えられる。③は、本文のお

もな筋は同じであるが、読みやすい文章に書き変えられている部分がある。後に校異を示した。

一〇一丁表から一〇六丁裏までの書き付けは、縦一八・四センチメートル、横二三センチメートルの別の紙に書写したものを半紙に貼り、綴じ合わせてある。紙が古く、他の書き付けよりも以前の書写と思われる。

「浅間山焼石砂降泥押之義二付書付」(一〇七〇一〇九ウ)のうち、一〇八丁表の「泥水ニ焼石交り押出候：疑間敷ものとも無之」、一〇九丁裏の「右之内吾妻郡山元村：事二而御座候」は、朱書きである。ほかに、八七丁表の「右松涛居大人以所蔵写之」、『文月の記』の読点などが朱書きである。書写元本にあったものと思われる。

「御料所并大名衆領分損毛高荒増書付」(一一〇〇一〇一一オ)と、「御中間頭差出候書付之写」(一一一ウ一一三ウ)は、史料集にないものである。

【凡例】

翻刻にあたり、底本にできる限り忠実であることを原則としたが、読解の便宜上、次のような処理をした。

1、漢字は現在通行の字体に改めた。但し、哥・鉢・云などとは、そのままとした。

2、合字は、開いて表記した。

3、各丁末に、丁数・表(オ)・裏(ウ)を、符号で示した。

4、改行は、必ずしも原本に対応しているわけではない。

【翻刻】 『浅間ヶ嶽焼書付』(後半)

『文月の記』(八九オ)

泰山崩れて原となり。桑田変して海となる。嗚呼まことなる哉。比しも。天明三とせ星昭に次し。軍閥のとしの半は。信濃なる。浅間の御嶽。焼しとなん。焰千尋に燃あかり。砂万頃に逆り。遠近の村里もひたみちに埋れて。跡方もなく失たりけるよし。さながら劫火のそめいろ山より燃出て岩戸の関をも焼払ふ心地こそすれ。是をはるかに。見きく人数に皆肝を消し魂を飛さすといふ事なし。爰に。高崎のさと。藤屋の何かしてふものゝむすめとなん。彼の信濃なるうきありさまを目のあたり見聞て。あてやかなる詞のはし。妙なる

(八九オ)

ふての跡。いとまめやかに書付しをうなしますれめのいみしとや有けん。去人。文月の記といへる題号をなんして龍生の花ころも。定めなき浮世を厭ふ心の縁にしはなれかしともて読しを。やつかれも共にいみしく思ひつゝ、けて。頓て拙き筆をといて。続かぬ文のそこはかとなく。異の嘲

りをもかへりみず。巻のはしめになんおきはんへる

天明五のとし霜ふり月のその日

洛東 山陰樵士識

〈九〇ウ〉

維天明三の年、水無月の廿日あまり九日に、小雨ふりて、をやみたれと、なほきりこめたるやうにて、うち散ハ何ならんと硯のふた扇などにうけてみれハ灰なり、やかて木草の葉にかゝりて、霜の置たるかごとく、信濃の浅間が嶽もゆるといひの、しる、さある事ハ伊勢物語にもいひおき、今はたたまさかにもある事なれば、人も見なれて、おとろかす、文月の二日またふりいつ、こたひハ薄雪の如く、さえたる月夜のごとし、かくあることハ、豊としのしるしなりとことくまにいふめるを、舌おほし、おほやけのいみ給ふことなりなんといふ人もあれと、さしあたりさはることなけれハ、いとう心遣ふ人もなし、はた五日の午過比、又鳴いて、いた戸よ、障子よ、ひ、れたれハ、またもや灰のふるらんと

〈九一オ〉

見るに、いかめしき雲の一村立おほひて、戌亥のかたへなひきたるまでにて事なくて日暮にけり、夜も明て、六日の朝またき、起いて、みれハ、庭も笹も、白妙に木草皆花咲たることく、雪のあしたの気色にて、いとめつらかなる詠なり、おほき驛路なれば、家さよりいて、かきよせ、たこ

にいれ、箱にもり、はこひいる、空は名残なく晴て、日影いとあつし、今年は三伏も時ならず涼しかりしに、此儘にてあつさつ、きなば、いなはよくしけりけんといふ程に、未の半過る比また鳴いつる、いつくよりもはけし、立いて、みれハ、子午ハはれわたり、戌亥より辰巳へ黒雲たなひき、行先目のはてもなし、この煙の行かたハいつこまてか降らん、遠近の人のみやハとかめんとよみしハかく恐ろしき空にハあらし、思ふに、もゆる煙の立のほるほどにそ有けらしなと

〈九一ウ〉

いふうちに、雲ひろこりて、黄昏過る比、さら／＼と降出たるハ夕立にやとおもふに、さハなくして砂ふることおひた、し、空は鳥壁の闇のうちより稲妻ひらめきわたる、こハけしからすと云程こそ雷おとろ／＼しう鳴はためき、浅間嶽よりもえあかる共極桜のちりかゝることく、夜もすからに砂降雷やますいねもやらす起もやらすに七日になりぬ、つとめてみれはさきのよふりたるよりハあらき白砂高く積りて板屋の石もみへぬはかりに埋たり、行來の障りなれハとて、かきあつめたれハ門々に時ならぬ雪の山作りいたせり、こゝらのまはひにかうやうの事ハまたき、も伝へす、宝永に不二のやけたるもかくや有けん、されとさかひはるかにへたてつれば、此あたりにはかゝる事ありともきかす、人さうちよりてたゞあやし／＼といふうちに、午半

過る比俄に日暮にけり

（九二一オ）

空は墨を摺たるやうなる中よりいとながきいなつまとものかすひらめきはた、かみ鳴わたり、かしらの上に落かゝる如く、ちのそこへひゝきて上下にて鳴合たり、山ハいよ／＼鳴とよみしんとうし板戸障子ハひゝきかよひてはつゝる、ばかりなりしわたる音とおひたゝしともいふはかりなし、かせも吹ぬにえもいはすなまきさきかのときくして鬼やいてくらんとおちおのゝ、きくれまとひてものもおほへす、世ははや尽ぬるにやとおもへとせんすへなし、只うつふしに臥たり闇路をたどる如く何のあやめもみへわかすともし火てらして集り居る、たま／＼大路行人は、松など燈して行かよふさまとこやみの世と成にたり、やゝ、神鳴音も遠くなるやうなればかしらもたけてみれハ、南のさうしにうつりたる空の色は紅のこつくみゆ、こはいかに（九二一ウ）

此上にまた水ならぬ誠の火の雨もや降つらんと生たる心地もせず、とかくするうち赤き色少しつゝ、さめて漸人の面しろ／＼とみへて夜明にけり、板戸おしひらきてみ出したれハいまた時ハ申の半にて有ける、怪しや鬼のまといすにこそとあきれて詠やれば、空ハうすくきハみて、雪のふるへき色なるに鳴神絶間もなし、雨は一雫もおちず、たゞ砂のみふりにふる笠にあたる笠あられのたはしることし、さ

き／＼^虫・は大きやうなるふれり、いつまでかくてあらん

かゝるあやしき雲のたつときは、よそへおひやる事ありとて、七尋はかり成伊勢の御祓ひなほやかなる御幣ミヌサにまといやうのものかつきいて、何かれ鳴ひゝくものはやししたて、鬼をしはるよ、浅間山の火たさらはをとらんといふ声、かまひすしおのかし、

（九三二オ）

耳ふたき目おほひなからひかるにもおちず、夜一夜呼の、しりありくに神もまけしと鳴ひゝき、砂ハなほ／＼あら／＼しくふりくらす、けに今宵は星の逢夜なれとおもひもかけず只おそろしくて、手をつくりひたひにあて、神仏たすけ給へと、経よみねふりして明るをまつ、からうして八日になりぬ、つとめてみればさきのよりまたあら／＼しく砂の黒ききもみたるかたかやかにふりつみたり、板ひさしたはみ落、むつかしき住居ハいくらともなく柱をれかべしろはなれてかたふきたるもあり、忽ちにたふれて梁の下よりからうしてはひいつる人も有、これにおとろきて、さはかり神鳴ひゝくにもおそれず屋のむねへ上りて、ふりつみたる砂をかき落す、黒煙たちてすさまじ、此おとにけされてかさにあたる音のなきハ雨になりけりとみれば、（九三二ウ）

大路行かふ人のみのも笠もみな真くろになりたるハあやしとよく見れば、ひちりこのふる也、家にのほりたる人もみ

なく、小田の苗代かきたるさまして逃くたりぬ、いつこかはや泥の海になりたるらんとおちおの、くとはかりありてをやみけり、扱ア扱アひ落せし砂ハ軒端とひとしくなりていつちへかかさやらんかたもなけれハ、そのま、大路に引な圍し行かふ人の足のひらを見上るはかりになりぬ、その日もくれて此ほどのよの目も合せねハ人々疲ツカれていと、くいねたり、明る九日になりてそや、心もおちいぬ、されと空は雲となく風もなくおほろくとして日影もみへず、きのふ残りたる屋根の真砂をかきはらひなどするにいとしろくつやめきたる毛の四五寸はかりなる、なほ長きハは尺に余りたるが降来て人毎に拾ふ、その日鳴神のひまをもとめ

〈九四オ〉

前橋といふ所へ行たるもの逃かへりて息もしあへず、悲しき事の限をも見つるかなとかたる、実政の渡しハ、戸根川のせまりたる所にて常さへ水はやく底ふかくして色藍よりも青し、岸うつ浪もくたけちるほとなるハ少しの風にも舟を出さず高き所に関をすえてこれを守る、行か、りたるものとか舟に乗んとする時、向ふの関より笠をあげて水上をさし教ゆ、何ことにや見やれハ川の上二尋はかり高く山のやうにうねりていと大きやかなるおろちかしらならへておしきたる跡もみす逃のひてやうく、高き所によりて見れば、大蛇にはあらて大木の様ながらぬけて流るにや、た、すさましくてよくも見わからす水は硯の海の色して、三尋

はかりなる火石黒けふりうつまひて行、中に幽に人の声今を限りと

〈九四ウ〉

泣さけひて浪のうへにきこゆるもあり、犬の声、牛ぞ、馬その、おめきて行も聞ゆ、あるは家のむねに乗なから流れて、忽水の底に沈にや悲しき声ともして消はてたる男女数をしらす、家の器、数を尽して流れ行、俄に出たる水なれば、ゆくりなく機織ハタタ台に乗なから、腰に絹をゆひ付たるま、に流行、若き女の背に子をおひ、前にも抱て、屋の上にたゆたふ、此にたすけ給へと声の限りさけへとも、舟なけれハせんすへなし、少し岸ちかくなる時に、さて網といふものをさし出すに、抱たる子をその中へなけ入る、上て又出すに、背におひけるもなけ入て、女は手を合せて拝みけり、その母をも助けんとなかれにそひた前ホテマみはかりに行に、火石流れておしか、り家ともに浪の底におししつめらる、次第に泥おし来り川も岡も一ツになり、矢をいることき

〈九五オ〉

早瀬の水少し静にた、くたり、坤軸ツラキといふものくたけて世界一度に泥の海になる時のきぬらんと、気もたましひも消はて、腰ぬけ立をあからすさはかり恐しき中に、若き男の老たる母と、幼き子を二人連たるが、子を捨て母をおひ、川中へ行時、母声をあげて、われをすて、子を助よと泣さけぶ、折しも長櫃流れ来る、母を櫃の上へのせ手を合せて

拝み立かへり、ねなから二人の子を肩にのせ浪をふんではしり来る、近くなると岸の上になけ上て、母の跡をしたひさか手を折て行いきほひめさまし、そのこゝろさしも天にや通しけん、からうしておひ付て母をも助けり、これを見るに少しいき出たる心地して立上る、また若き女の幼子をいたき浮ぬ沈ぬなかれ来る、岸ちかくなりたれとあかりかねたり、此子ハはや死したりと見へて川へ打捨、(九五ウ)

女ハはいあかり声をはかりに泣臥せり、身にまさる、ものなかりけり、緑子は、やらんかたなく、かなしけれとも、とはかゝる事をやとあはれはかなきかすくにて目もあてられぬ有様ときくに涙もと、まらず、此国にかゝる水の出る事いつこならん、草津のしらぬといふ山のぬけたらんなどといふ内に、一日ふたひも過ぬ、河原場といふ所へ行たる人の帰り来て、ふしきにもいのち助かりて、こゝまでまゐりぬ、語とも人誠と思ひ絶よし、水にて家の焼とは、昔よりもいまた聞侍らず、そも浅間山、水無月の末より時々やけたるに、子の方より焼ぬけて震動すること数のいかつちむれて落るか如し、大なる火石二十三十飛上る、二尋三尋上りて落下よりハ飛上り、中にてうちあひくたけちる、五尋七尋の火石飛出るとひとしく硫黄流れ出て泥おし出し山川木草その俣に動揺して

(九六オ)

なかれ行、その中に火石もへ上り七尋八尋の大木に火うつりてあめをこがしつちをうごかしてやけひろこり、おし行道の村里家居木草みな焼失ぬ、泥の高サ七八ひろ岡の上五六尋川迄ハふた尋三尋もありとかや、泥に埋れ火にやかれ、水に溺れて死するもの此あたりみなたにかそふへからす、しらぬあたりに失たる人幾千万ならん、牛馬も泥のうちより頭はかりさし出し死せるものもまれにはあれとも助る事叶はず、水ならねは舟ゆかす泥深けれハ人行ことも叶はず、たま／＼あさきところありても、火石の烟やまされハあつくして足を入る事ならず、焦熱大焦熱のくるしみもかくやとみゆ、此折しも小笠原さかみの守殿、御国元へおはします、うす井峠のふもと松井田の駅にやとり給ふ、その明日、牧野何かし殿ときこえし御方も、此道にかゝり給ひて一うまや

(九六ウ)

へたて、安中てふうまやに宿り給ひぬ、さらぬたに、けはしきうすぬ坂も砂いしふり埋みて、人のゆき、もたえたれハ、こゝに六日そと、まり給ふ、さてあるへきならねハ召つれ給ふ人して道作り給へとも、駒のひつめもた、されハかちよりそこえ給ふ、あやしの賤もかよはぬ道をさるやんことなき御かた／＼の踏なれ給ふぬ坂をいかにものうくおほゆらん、昔ハ木曾のかげはしを、あやうき事のたとへにて命をからん蔦かつらとそいひける、治れる世の御恵

みにて、今はた道行人もさはりなく、こたひ浅間の焼いて、しはしうするの道絶ぬ、むかし日本武尊此道をふみそめ給ひしより、かゝるためしハあらざるへし、此所さへかうやうなれハ、まひて坂本、軽井沢、追分のうちまやなどハいしのふる事盆をかたふけてうつつすか如し、なかはやけうせ残る家居も屋根を打ぬき内に石つもる

〈九七オ〉

ほとなれハ、親を呼び、子を尋ね、命をはかりに逃げちりて人なき里となりにけり、広野は草の色もなく、鶉の床もやけうせて、き、すのつまもかくれえず臥猪の床もあれ行ハ里へ出行かふひとをあやめるときに身の毛もいよたちぬ、なにはしとかやいへるは、高き事川より三尋なるか橋のうへにのり、水また三ひろとかやさはかり大いなる水の勢ひあめをひたしつちにあふれ、関所をはしめその筋のむら里ことくくおし流し桑田へんして海となる、あは山つなみといふもの、俄に押出たるなりとかや、烏川も水まして、極瀬の渡も、たえ、利根川のすへは、泥にうつみて行た、ゆれハ、水はわかれてひき、に付て下る、田畑村さとへたてなし、国境打越へて本庄のうちまやと、ふ、しといふ里の間に、横切て中仙道の南をかれゆく、すへて此水筋、福嶋、五科の関も跡方なし、

〈九七ウ〉

昨日はさもゆ、しかりし家居も、けふハ飛鳥川の瀬とかわ

る河岸くハ泥の入江と成て高き所に有家々にはあたりの人寄集り、三日四日ハ物ハくわず、水にかつえぬせめていかきと云物を泥の内にふせて、其目よりもりたる水を飲み露の命をさ、へたれとも、風の音すれハ、又もや水のますかと肝を消し、雨の音を聞てハ石砂の降かと魂を飛ばす、わくらわに、水を通れたる所よりしる人尋ね行ても泥ふかければあたり近くへもよりえず、或ハ大木の梢に上り二日三日ゆられたるが次第に根くつろきてうち倒れ水底にしつむも有、岸の上にはね上られてはからず命助かりたるも有とかや、其程の心地いか成けん、二三里、四五里流れてからき命拾ひたるも有ども、家もなく、妻子にはなれ、田畑を失ひたれハ、生る甲斐なしと、よ、となくも有、又二十にも足らぬ女の十六里か程流れ来てけうにして助かりたるも有、大慈大悲のちかひの網に救ひ上給ふらんと思ふによみちに行て帰りたる

〈九八オ〉

よりもたふとし、空ハ日数にかき曇り月日の光りもさやかにらす、時々雨降霧の如くに灰うち散、いか成山なりとも底を尽して焼ぬらんと思ふに、此程降積たる石砂をあつめは、浅間山より高かるへきに、いまた残りのふる事ハこハそもいか成天変のさとしにや、灰のふりたる所何十里ともしられす、水のおして行めぐりたる道凡三十里か程ハ、玉祭わさもせず世界も異なる心地す、まひて泥の入江に集り

たる人は、こゝに命尽ぬるにやと目をともに髪をたち、神
や、仏をたのみ奉りて、只空をのみ見上げてなくに涙も尽
ぬるとや、こと国にハかうやうの事ありもやせん、此日の
本のうちにしてかゝるためしハきゝも伝へず、ふしきとい
ふもなをあまりあり、

〈九八ウ〉

天実生寸、無古今異邦姑舎吾女吏部之八斗於吾
邦果無之有之予一日於 冷公書架上捨得一斷
策凡七十板余尚逸其半其書記元室一
權貴之事其 邸妾所撰金旨述郭況

金穴之背而行文正鶴源榮二書即榮

之同机檢衆生文之突轍而能不失尺寸

可謂妙寸 冷公與予奇嘆不已頃復得

一奇書於 冷公不過十枚板百金予與

冷公柏几嘆未曾有曰仏歎仙歎抑箕之妙此歎

母寧吏部之降歎蓋 邸妾之作即武文古今稱呼

〈九九オ〉

國爾之不同其事執頗亦近似茲書記述今年七月信野

二邦雨砂雨火雨泥雨毛山潰河湧邑聚烏有人

畜夥碎之事比之源榮擬倫宵壞不具吏部体

格神句豈多難最奇之筆哉但其臆写枚軋字

句可疑世枚処予竊訂正 冷公曰野之高崎

藤屋某氏所撰天実生寸、無古今宋人淚玩所謂

遜坑機雲没後云、此非虚語嗚呼如此書可謂真
正寸子未曾有之書云

天明癸卯冬十月播磨請約書於靈岸

邸曹舎

〈九九ウ〉

文月記高崎藤氏所手録也不
詳藤氏如何人蚩然由此觀之
不祿之婦人也余往獲各子
膽写項獲一本於某家校正
旦再写目贅一言於卷尾云

寛政八年丙辰二月中院

虚舟散人識 印

〈二〇〇オ〉

右尾藩府南郊松涛居主人之以藏本

安政三丙辰歲三月十有六日

蓬左城東之杉邑之借宅おゐて写之

珍文館主人藏印

〈二〇〇ウ〉

信州浅間嶽は常に焼て頂より

煙立候事二而然るに天明三年卯五月

廿六日より勝れて焼高く鳴り出し

毎日毎夜石を吹上其石火と成りて

麓へ落或は二三里外へ落石ニ当り

〈一〇一オ〉

くたけて散り候時小石火と成りて散乱ン

致しまたは大き成は空中へ吹上候節ハ

其形ち茶碗火鉢のこたく火の玉と

見へ申候えとも二三里脇へ落候節ハ一把

ほとどの火石也又は小家ほと成大石なと

坂本宿へ落其石壺つは五間式尺

程の大石なり七月六日より鳴音高ク

〈一〇一ウ〉

ものゝ鳴音は不相分やうに響き雨の

こたく石降り誠に火の雨降り候如く

家〳〵のうへに落軽井沢宿にてハ

家数四五十間はかりも焼失いたし候

七月六日より老人婦人子供ニ至迄

馬牛までも立去り宿中に漸〳〵

〈一〇二オ〉

男之分斗式拾四五人も残り鎮火すと

いえとも人少にて常の火災と違ひ

上より降懸り候へも手に合不申命も

危相見候自逃去り申候翌八日晚七ツ

時ころまで火石ふり夫より鎮り申候

沓掛ヶ追分宿は五日六日之内ニ立

去り候故人馬に遇等も無之坂本宿
軽井沢宿は家守り火を妨居候而

〈一〇二ウ〉

最早居り難く相成候間追平と云所

逃候へハ浅間嶽一山の獸不殘火に

恐立退候付追平の原にハ諸の獸の

中にも大蛇かしら四斗橋の小きかこたく

出居て其身の半川に横たわり川水

をせきとめ候こたくまたかり居て逃

来る人を見てかしらをふり立向ひ

〈一〇三オ〉

候う様子ニ付諸人驚きまら〳〵跡へ引

返し望月の方へ皆〳〵逃退申候

すへて道すから山の犬籽正散乱申て

人馬に喰付申候故小太刀やうのものを

持て追払ひ通り申候是等も鉄砲

にて追立候とこゝろへ逃候て人に逢ひ

候ゆへ向ひ候様子に御座候逃退候節ハ

人〳〵鍋なとかむり候ものハ火石ニ当り

〈一〇三ウ〉

打われ蒲団夜着躰之ものかむり

候ものは火石落かゝり焼付給而

早髪ニ成候而右之品谷へ捨木の枝

など折持てかしらを弘江へ逃退候
仍之戸板式枚重に致し男式人にて
前後を片手持に差上片手二は小太刀
躰のもの携山の犬向ひ候節追余ケ

〈一〇四オ〉

通り申候而石戸板の下へ女子老人子とも
歩行を逃退候え共道すから焼石を
またき越通り候付老人女子はまたき
兼遅り候故是又抱越させやうく
望月辺迄逃退候道一町ほとも
行て三四度ツ、戸板をふるい火石を
落し通り候然る所に七月五日六日

〈一〇四ウ〉

七日八日迄浅間山北の方二当り黒雲
一むら散りて焼鳴り石吹上候度毎二
雷大きに鳴り焼黒雲へ水をまき上
候事眼前二相見へ空中にて火石
の大きを消し雨ことく二石はふり
申候えとも雨水は一滴も降り不申候
横川御番所様に大河御座候処此川

〈一〇五オ〉

重さなり候之由風聞いたし候輕井沢
の屋根より見渡し候処凡式拾里四方
に青きもの一葉も不相見候北西の方ハ
坂本宿より先へ通路無之様子ハ不相知候

〈一〇五ウ〉

碓井峠より往環留り焼石二而道無之
罷成申候輕井沢より浅間へ相渡し一里か
ほと隔り候和田峠辺は白昼のことく
罷成候由右のことく焼抜ケ候えとも
誠二名山ゆへ形ちは如前之今以
常の通りに焼居申候而無間谷の
辺より山の麓中段迄も焼石二而

〈一〇六オ〉

火に成候えとも道々樹木無之御山殿
何ことも無之候
右之通七月十八日輕井沢宿重助と申もの
宿場居住此度母とも二無難にてたすかり
家居は焼失いたし候えとも母子供二無難の
御礼参に伊勢へ参候由具二咄し承り候

〈一〇六ウ〉

水一滴も無之様に卷上申候右御番所
辺へは降り積り候小石とも四五尺二

浅間山焼石砂降
泥押之義二付書付

当卯七月五日浅間山大焼ニ而震動雷電致家鳴

六日昼過より八日昼比迄石砂灰泥降昼夜無差別
白昼如く闇夜灯火を用諸用を遅強降之詠ハ

七石撃潰家有之田畑悉ク石砂冠ニ成軽重左之通

遠藤兵右衛門支配中山道

一 軽井沢宿焼石三尺より四尺式三寸迄其上へ泥一二寸降

焼失家五拾壺軒焼石二而

石二而撃潰家七十軒

石之撃死失男老人馬拾五疋

一 沓掛宿焼石一メ並二降

民家人無難

一 追分宿焼石砂灰少々降歩合不当

同断

一 浅間山より出候字千ヶ崎湯川両川水路石砂泥にて

降埋用水泥川取水還高信州佐久郡辺 (一〇七オ)

四五万石皆無川様成

一 懸塚之内碓氷峠焼石砂二三尺降

但御関所無難遠見番所石ニ被撃破損

一 坂本宿 焼石砂式三尺 松井田同一尺四五寸

安中宿 同壺尺一式寸 板鼻同壺尺余

是より中山道筋下江次第二薄降

上州

一 碓氷郡村々焼石砂六寸より一尺三四寸迄

一同州其郡郡村々大豆程砂利五六寸より七八寸迄

但妙義山麓近所之甘楽郡村々石砂利八九寸より

一尺式三寸迄

一同州郡郡村々焼砂一式寸より五六寸迄

但郡馬郡村々之内所々より灰斗一式寸降候所も有之

一同州利根郡郡村々焼砂利一式寸より三四寸迄

但利根郡之内灰斗降候所有之

一同州佐佐郡郡村々焼砂灰一式寸より四五寸迄

但三郡之内寸ニ不当程降候処も有之

(一〇七ウ)

一同州新田郡郡村々焼砂壺式寸より三四寸迄

泥押之様子左之通

七月八日午之刻浅間山之内無間ヶ谷鬼神ヶ谷より

泥水、焼石岩交り大燃ながら大地川小宿川へ

押出夫より吾妻川江落込川水如勢湯高サ常有二

三四丈も高押来り吾妻川利根川附村々泥押

にて流失家人馬泥ニ溺死候者数多有之大水之

諸木根より引抜押流其外民家田畑泥埋ニ相成候

荒増如左

泥水ニ焼石交り押出候者吾妻山郷抜候江戸近所は

不及申同郡近村よりも存有之候処能々相記候ひハ

本文浅間山之内両谷より出候相違無之吾妻山之後

浅間山麓寄二候ひハ疑問敷ものとも無之(朱)

一 利根川筋川路式十二三里之間流失

家諸道具流死人馬牛畜類樹木燃立候石岩泥

水二而押埋川向江之通路絶漸川中七八下程一埋二

候上水流候得共必湯涌候故魚類悉く死候而川(一〇八才)

端へ押寄申候

一 吾妻郡鎌原村小代村小宿村芦生田村右四ヶ村吾妻山

元二候処七月八日浅間山之内無間谷鬼神谷より泥水二

焼石岩吹出し大地川小宿川え押出し両谷川

一所二相成右四ヶ村を引包み吾妻川え落込候付一時二

民家人馬牛共乍押流候凡家数九百三拾軒程人数

式千七八百人死候由

一 吾妻川上より川下利根川落合之処迄川路十二三里有之

川附之村々ハ吾妻郡群馬郡御料私領四十五ヶ村

泥押流失家式千軒程流死人式千式三百人田畑泥

埋高一万七八千石泥深サ一丈より式丈四五尺程

一 右川附村々内吾妻郡坪井村名主助左衛門と申もの

大分限にて諸作方内用をも承り家内百人余山寄

之所二而七段二家作を構へ上ノ段居宅下六段二質物

酒穀物小間物之類商ひ候店又ハ酒造時油造油紋り

蚕飼等之場所迄高主居間より眼下二終日之勤方を見

下候様二建候家之由囲置候金子斗も廿万両余有之候由
(一〇八ウ)

之処泥押而一時二家退金錢嗜道具押流家内も九十人程
死失助左衛門一族十七八人一命斗漸助り候由

一 利根川落合之処より利根川筋新田郡平塚川岸まで

川路十里余有之候処川附村々御料私領群馬郡那波

郡佐位郡凡村数百四五十ヶ村民家田畑泥埋二成流失

家并怪我人等有之候得共川上与違ひ不意之事二

無之一二時前より相知候故及覚悟怪我人無数四五人

ならてハ無之牛馬も三四疋ならてハ押流不申候田畑

損毛ハ高七八万石は相聞也

但吾妻郡山方ト違ひ群馬郡那波佐位郡ハ里方故

打開キたる場所故村数多有之也

松平右京亮御預り

一群馬郡李御関所流ル

一 那波郡五料御関所泥埋 番人怪我無之

但御関所候ト李小牧ト申所二而家三百軒流男女

三人死矣

松平大和守預り

一 那波郡五料御関所泥埋 番人怪我無之

但五料村百姓家屋根上迄泥埋二成

遠藤兵右衛門支配

一群馬郡中嶋村

此中嶋村え長九間横六間高式間半程之焼石泥水二

交押来り此所二留ル

(一〇九才)

遠藤兵右衛門支配

一群馬郡下之宮村

泥埋三斗軒惣田圃廿式寸五分之内廿一丁
九反分堀入二成堀深守文

此村え長五間横三間高九尺余之燒石泥水ニ交押来り

この所ニ留ル

但種籾川筋村ニ二式間三間又ハ八九尺程ツ、之燒岩

数多所ニ有之

酒井駿河守領分

一那波郡芝町不殘泥埋ニ成家藏之屋根之上壹式寸位

相見へ瓦を取屋根を破り泥を掘出し同様之村ニ十ヶ村余

有之

右之内吾妻郡山元村ニは川を隔入り候遠路無之様子巨

細難相分見分役人等も矢文を候及向合候様子記候

事ニ御座候(朱)

(一〇九ウ)

御料所并大名衆領分損毛高荒増書付

石砂降

上州群馬郡高五千石損毛

遠藤兵右衛門支配所

石砂降泥押

信州佐久郡高一万石余

辻六郎左衛門支配所

邑楽 新田

山田 佐位

上州 那波 緑埜 郡六万石程損亡

群馬 甘棠

碓氷

上州

勢田 緑埜

郡高式万石余

前沢藤十郎

支配所

泥押

上州

群馬

郡高式万石余

原田清右衛門

支配所(一〇才)

石砂降泥押

上州

邑楽

新田 郡高一万六千石

余布施弥一郎

支配所

同

上州

那波

郡高四万五千石程

松平大和守

領分

上州川越

砂灰降

上州

邑楽郡高式万石程

松平右近将監

領分

同館林

石砂降泥押

上州

碓氷

群馬 郡五万石余

松平右京亮

領分

同高崎

石砂降

上州 群馬 郡高式万石余
碓氷 板倉伊勢守

同安中

領分

右浅間山焼石砂降泥押之様子荒増
書面之通御座候以上

卯八月

〈一一一才〉

石砂降泥押

上州 佐位 郡高式万石余
那波 酒井駿河守

同伊勢崎

領分 〈一一〇ウ〉

天明三癸卯年七月

御中間頭差出候書付之写

石砂降

上州 甘楽郡高一万五千石程

同小幡

松平玄蕃頭

領分

一 当月十三日御覚立浅間山鳴響候二付見分被遣早道御中間
罷歸り申聞候趣左之通

石砂降

上州 那波 多胡 郡高一万石皆損
碓氷 甘楽 松平栄松

同吉井

領分

一 十九日夜追分宿江参着仕様子承合候処六月廿九日より鳴
響夥敷御座七月一日二日三日之間鳴響はけしく御座候よ
し六日七日八日迄三日之義ハ鳴響強く震動雷電仕候へ共
追分宿之義ハ別条無御座候近郷村之者共逃退申候よし
砂石等も降不申候

石砂降

上州 甘楽郡高一万皆損

同七日市

前田右近

領分

其外御旗本衆知行之分
損毛高難知

一 沓懸宿之儀ハ砂ハ少々降申候へ共別条無御座候
一 輕井沢宿之儀は同五日夜五ツ時より火石降出し宿内之者
逃退申候由両方宿場より南側所ニ火付出火仕フ家数五
拾壹軒焼失仕候八日四ツ半時迄石砂降積る式尺五六寸よ
り場所ニ寄四尺程迄降重り候所右石砂之重りにて廿一日
比迄二追々潰家廿五六軒有之候十日より十三日迄之内一
日に一兩度之泥降候義も有之候由其後ハ今二少々乙降申

也宿内之内さんく二而今二相集り不申候二付牛馬^七死失仕候義ハ相知
（一一一ウ）

不申候へ共犬次郎与申百姓忝人七日夜火石ニ打レ相果申候よし御座候

一 碓氷峠熊野権現之社信州上州之境ニ御座候家数五十軒程有之候潰れ家九軒七日夜砂四尺程降申候

一 坂本宿潰れ家廿五六軒其外そんし家沢山ニ御座候同日出火二而三軒焼申候砂壹尺六七寸降申候竹木其外青葉之分無御座候

一 松井田宿砂降候義ハ八九寸程降申候田畑作物等無御座候潰れ家十九軒程御座候

一 安中宿板鼻宿高崎宿砂六七寸降申候
一 右之宿々七日八日両日昼夜之分ケ無御座候昼も灯をとほし申候

一 高崎宿より前橋宿迄道頃三里此間利根川有此川江四五間位なる火石流出川上村数五十四五ヶ村流出申候由

一 碓氷峠より坂本宿板倉伊勢守殿領分ニ而御座候板倉宿御代官所御座候由

一 高崎宿松平右京大夫殿領分ニ御座候

一 廿一日二小諸江参り夫より廿二日大笹村江参り浅間山焼やらす
（一一一オ）

承候処六月十八日泥砂之火降申候夫より廿九日小石降申

候七月六日七日八日之儀ハ夥敷焼大キニ火石十丈斗も上江上り夫より東北の方へ追々吹出し夥敷鳴響近辺之者共食事も得不喰候由鎌原村大前村西窪村中居村小幡むら生田村赤羽根村の方へ浅間山より泥火石一所二押出し家居等も流失仕候諸々川ニ成候所も有之右吹出し口火石泥共高サ廿間巾式町程由之山三ツ高サ七八間くらい成山ハ数不知出来申候火石之義ハ一ツ長サ廿間位より十四五間位成火石大分数不知程原一面ニ御座候石之高サ之儀ハ一間程白ニ相見申候

一 大笹村火石泥降口迄ニ而無難御座候鎌原村家百五十軒程流レ人数四百七十人余流失九十余人逃退大前村七拾軒余り流失人数三十人余流失四百人余逃退西窪村家四十軒余流失人数六十余人流失百人余逃退中居村家三十軒余内廿軒余流失七軒残り人数十五六人流失百廿人余逃退小幡村家五拾軒余流失人数七十八人流失百人余逃退内一人女声生田村家五十軒余流失百人余流失八十余人逃退
（一一一ウ）

赤羽根村家廿九軒流失拾一軒残る人数七十余人逃退三拾余人流失

一 右之外今井村金色村羽根尾村坂井村長原村其外村々家居流失候義ハ不相分右村々迄相越候へ共山又ハ川ニ成人家も無御座候二付大笹村々より名主候得共承合候処名主之方ニ而人数等相しらべ候由二付書付参申候

一 浅間山焼所之義ハ毎も焼候処之岸より焼出申候外ニ別条

相見不申候前懸村之方五六丈も高ク罷成申候所宝曆四戌之年焼候節ハ中段より焼出候由此度之儀ハ岸より焼出外

ニ替義無御座候廿三日ニ浅間山裳通り候処今ニ焼出少々になり申候

一 碓氷峠辺兎鹿等大分出申候中にも火石ニ打れ候相果居申候大分御座候坂本松井田牛馬飼料無之由ニ而皆々何れも

引出し先重之者被遣候由

一 浅間山より泥吹出候節谷此一向出不申候暫くへだて泥流

れ出申候泥出候節鳥の様成鳥三羽先之方へ相候り右之鳥参り候方へ泥流れ参り候尤山上へ右之鳥上より候へハ泥

も山上へ上り申候鳥参り候方へ泥流れ申候由七日昼九ツ時比より八ツ半時比迄右之通り流吹出申候由所之者申候

漸々御座候

〈一一三才〉

一 右泥流出候巾ハ壹寸半程草津山下之方より少々之候巾狭

く相成右山之向ニ而ハ四拾里余も御座候哉相分り不申由此所御代官原田清右衛門殿支配所之由ニ御座候往来案内

之者も無御座候ニ付得参り不申候

一 中仙道通る道之儀歩行通之儀ハ通用仕候へ共荷物等ハ人

馬差支通用無候得追々甲州海道通用御座候

一 草津山之方之儀ハ故障無御座候之由ニ付参り不申候

右之通申候処の御付申上候以上

七月廿九日

御中間頭

〈一一三才〉

【校異】岩瀬文庫所蔵本『文月浅間記』（版本）との異同の

なかで、特に大きく異なっている部分を左に挙げる。

九一才 信濃の浅間が嶽もゆるといひの、しる、さある事

ハ伊勢物語にもいひおき、今はたたまさかにも一信濃なる浅間か嶽のもゆるとはいにしへよりい、ふるし此国にはたまさかに

九二才 ことくまにいふめるを、舌おほし、おほやけのい

み給ふことなりなんといふ人もあれと、さしあたりさはることなけれハ、いとう心遣ふ人もなしー

ことくさい、あへり

九二才 浅間嶽よりもえあかる共極桜のちりか、ること

くー浅間の嶽よりもえあかるは花火の如く柳桜のちりか、るやうなるうちに玉はしり飛火かけ見ゆ

九三才 砂のみふりにふる笠にあたる音ハ次第にはけしく垣

ことしー砂のみふりてふる音ハ次第にはけしく垣根にあたるハあられのたはしる如く

九三才

七尋はかり成伊勢の御祓ひなほやかなる御幣ミヌギにま

とひやうのものかつきいて、何かれ鳴ひ、くもの

はやしたて、鬼をしはろよー七尺斗なる伊勢の御

祓二間はかりなる幣帛のまねひをして石等の大太

刀をになひつれて燈灯纏をしたて貝をふきかね

つ、みをならしおにをしはりてん

版末に「上毛高崎 羽鳥氏女一紅述 茅花園壺梅園蔵版

こはかみをけのも高崎のうまやとり羽鳥氏の刀自一紅の

うし皇国ふりのかんなもて眼のあたり見もしき、もしかい

つゝりたる冊一卷ちかさわたりの人々はさらなりうちわた

すほと遠かた人さへようくに見まほしとさうそこしても

とめ来せしにそかさきくをめぐりくて来あはれくちな

ん事をおそれはたおのれかゆかりある事を知りて友とちの

す、めけるかまたこたひ桜木にもものして其人々におくりま

いらすになむ文化十あまりふたとせといふとしの霜ふり月

多胡廻屋の逍温かまをす」とある。

(あさひ けい)